１月７日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書　1：　29－34

「神の小羊」

「異世界転生もの」や「なろう系」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。これは小説や漫画の世界でこの 10 年くらいの間、一大勢力を確立したジャンルの一つを指す言葉です。様々定義しうるのですが、ざっくり言うと、「異世界に転生した(生まれ変わった)主人公が、それまで培った能力や経験を用いて大成功を収める」ような物語のことを言います。

現実世界で成功することが難しい現代にあって、一種のカタルシス(浄化)を得る手段として定着しているように思えます。ままならぬ現実とは違い、自分の能力を遺憾なく発揮したり、チート(cheat、反則、いかさまの意)のように相手を圧倒したりする主人公に自分を重ねているのかもしれません。

そのような人間の精神性は、救い主の到来を待ち望んでいた2000年前も大差ないように思えます。人々は救い主に現実からの解放を期待していました(「見ることのできない目を開き／捕らわれ人をその枷から／闇に住む人をその牢獄から救い出すために。」イザヤ書 42:7)。

その視点から見れば、男性だけで 5000 人もいた人々を満腹にさせたり(「イエスは、『人々を座らせなさい』と言われた。そこには草がたくさん生えていた。男たちはそこに座ったが、その数はおよそ五千人であった。さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。」ヨハネによる福音書 6:10-11)、湖の上を歩いたり(「二十五ないし三十スタディオンばかり漕ぎ出したころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。」ヨハネによる福音書 6:19)されるイエスの姿は、まさに彼らの期待する、強くて特殊能力に溢れた主人公だと言えます。「この暗い現実を一発逆転してくれる存在」として人々がイエスに望んだのも無理はありません。

しかし、イエス自身は、そのような人々の期待に全て応えられたわけではありません。むしろ、力で他を圧倒することなく、神の救いを実現されていかれます(「彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。傷ついた葦を折ることなく／暗くなってゆく灯心を消すことなく／裁きを導き出して、確かなものとする。」イザヤ書 42:2-3)。特別な存在としてではなく、徹底的に一人の人間として地上を歩もうとされました。

だから、小さな赤ん坊の姿で生まれ、成長し、そして他の人と同様、洗礼を受けるために洗礼者ヨハネのところへ来られたのです。

それは、何の実績も名声もない一人として来られたのは、神の救いには何の条件もないことを明らかにされるためです(「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。「行いによるのではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです。」エフェソの信徒への手紙 2:8-9)。どのような一人であっても、神の愛の中に生かされていることを示すためです(「しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、―あなたがたの救われたのは恵みによるのです―キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました。」エフェソの信徒への手紙 2:4-6)。

「その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。『見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。』」(ヨハネによる福音書 1:29)

神の、イエスの思いを受け止めたからこそ、ヨハネはイエスのことを力強く、獰猛な動物ではなく、「小羊」と表現したのでしょう。人間的な目で見れば、守ってもらうだけしかない存在である小羊です。しかし、同時にその歩みは、神の守りと安心の中で生きる存在のひな形でもあります。

その姿にこそ私たちは希望の光を見るのです(「命の泉はあなたにあり／あなたの光に、わたしたちは光を見る。」詩編 36:10)。

特別な力も、権力も、財力も、反則的な能力も、究極的には私を守ってくれはしません。ただ神のみが私を生かす。イエスの歩みはその最も大切なことを教えてくれるのです。